

日本音楽学会国際研究発表奨励金 受領者報告書

報告書：東京藝術大学大学院 専門研究員 三枝まり（東日本支部）

参加学会：国際音楽学会東アジア地域会（台北、2013年10月19日発表）

1. 発表学会について

東アジア地域の音楽研究者が、研究地域、専門、テーマを越えて交流するフォーラムを提供することを目的として2011年に創立された国際音楽学会東アジア地域会の第二回目が、2013年10月18日から20日に国立台湾大学（台北）で開催された。発表への応募は、国際音楽学会の会員に限られてはならず、今年の会議全体のテーマは「MUSICS IN THE SHIFTING GLOBAL ORDER」であった。発表者は台湾をはじめ、韓国、中国、日本を中心にアメリカ、ヨーロッパなどから約50人ののぼり、「戦後の東アジアにおける音楽史の（再）構築」「儀礼の音、文化遺産、エスニック・アイデンティティ」「国境を越える理論：地理的、学問的、文化的」「明治時代のけるドイツ人教師」「第二次世界大戦前のピアノ文化と東アジアの国々の近代化」などテーマごとに部屋に分かれてセッションが行われた。

2. 研究発表要旨

今回私が発表したセッションは、10月19日午後2時から行われた“A Century of Western Music in Japanese Reception”であり、日本における西洋音楽受容関連（ゴスペルを含む）の個人発表3本が行われた。発表は20分、質疑応答が10分であった。発表タイトルは、“A Study of Hidemaro Konoye : His View on Orchestral Music and his Contribution to the History of Japanese Reception of Western Music”（近衛秀麿研究－彼のオーケストラ音楽観と日本洋楽史におけるその功績－）であり、2013年から調査を開始した近衛家所蔵資料の概要について報告を行うと同時に、これらの資料を通して近衛の欧米と日本における音楽活動とその意義を検証した。要旨は以下の通りである。

2013年に没後40年を迎える近衛秀麿は、日本のオーケストラ史におけるパイオニア的存在で、新交響楽団（今日のNHK交響楽団）を創設し、わが国の西洋音楽の黎明期に指揮者、作曲家、編曲家として、日本の交響楽の普及・発展の基礎を確立した音楽家と位置づけられる。特に、彼の音楽活動は、《越天楽》の編曲に見られるように、日本の伝統的な音楽をオーケストラ用に編曲し、西洋のものと日本のものとの融合を試みたほか、ベートーヴェンをはじめとする西洋の作曲家の交響曲などから「近衛版」と呼ばれる近衛独自の編曲あるいは改訂を行った点が、最大の特徴であったと言える。しかしながら現在、戦前から戦後にかけての音楽家たちの足跡は、過去の音楽家として忘却されているように思われる。こんにちの音楽文化のいとなみは、かつての日本の音楽家たちが築き上げた取り組みの上に成り立っていることを改めて捉え直すべきであろう。

そこで、本研究では、近衛音楽研究所の協力を得て、初めて明らかになる近衛による編

曲楽譜や作品、書簡、蔵書など、近衛の音楽活動に関わる諸資料を収集・整理して、その全貌を明らかにし、それらを総合的に分析・考察することによって、近衛秀麿の音楽に対する取り組みの姿勢および彼の音楽観を明らかにすることを目的とする。特に、近衛が指揮者として扱ったレパートリーや、改訂・編曲された「近衛版」の楽譜を通して近衛のオーケストラ音楽観を明らかにすることは、日本のオーケストラ史がどのように形作られてきたかを理解するうえで欠かせない。近衛の音楽活動の生涯の課題と、近衛が自らに課したその課題がいかに関心され実践されていたかを明らかにすべく考察する。

3. 質疑 反響と感想

発表では特に西洋音楽受容者としての近衛秀麿の活動に焦点を当て、近衛がどのような音楽を聴取し、著名な指揮者たちとの交流から何を学んだのか、欧米での近衛の活動の実態とその評価、ドイツと日本という枢軸国側での近衛の政治的な意味、欧米における近衛の音楽受容、いわゆる「近衛版」と呼ばれる楽譜の改訂を含む近衛の編曲理念を中心に取上げた。

質疑応答でまず私が驚いたことは、近衛秀麿という名前がすでに少なからず諸外国でも知られていたことであった。それは、これまで私が研究してきた他の戦前の日本の作曲家の名前が日本国内ですら知られることが少なかったことと比較して対照的であった。そして、日本の交響楽運動への貢献について明らかにするためにもつばら欧米における近衛秀麿の音楽活動を調査してきた私にとって、戦前に三度、内閣総理大臣を務めた近衛文麿の弟である秀麿が、特に中国でどのように受け入れられていたか、その役割と評価を調べていく必要があることを感じた。

このような状況の中、近衛秀麿の欧米での音楽活動、すなわち、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団、フィラデルフィア管弦楽団、BBC交響楽団などでの指揮活動やその評価を紹介できたことは、成果と言ってよいだろう。「信じられない」などといった感想が述べられ、新しい近衛像を提示することができたのではないかと考えている。

日本の雅楽を編曲した《越天楽》にも特に質問が寄せられ、他の作曲家の作品とどのように違うのかということについて尋ねられたほか、会場で聴いてみたいとの要望もあり、関心の高さをうかがわせた。

その後の休憩時間にも数人から声をかけられ、全般に好意的な反応だったと言えよう。特に、上海の若手研究者から近衛秀麿が1936年に上海工部局管弦楽団を指揮した際の資料があるとの情報提供があり、帰国後スキャンデータをメールで送っていただくことができたことは成果である。その内容は、中国における近衛秀麿の音楽活動を示す内容として、現在校正中の近衛に関する著書（音楽之友社、2014年刊行予定）でも紹介する予定である。私からは《越天楽》のスコアの入手方法を伝えることができ、注文することができたと後日連絡を受けた。今回をきっかけに、今後、中国における近衛秀麿関連資料についても調査、情報交換をしていきたい。

私が台湾を訪れたのは初めてであったが、会場となった各部屋には大きな花が飾られ、また参加者が広いキャンパス内で迷子にならないようになど細部にわたって十分な配慮がなされ暖かく迎えられた。学生スタッフたちのこやかで丁寧な対応も印象的であった。学術的な成果は言うまでもなく、アジアの研究者同士の文化交流という観点からも大変貴重な機会であった。このような機会に、資金的援助をくださった住友生命保険相互会社に心より感謝を申し上げたい。